まえばし教育の日文化事業

前橋市 MAEBASHI CITY 新出土文化財展2023

― 令和４年度発掘調査の成果 ―

江田村西遺跡№２（高坏）

上細井中西部遺跡群№4（銀象嵌鍔）

元総社蒼海遺跡群(91街区)（鬼瓦）

上野国府等範囲内容確認調査（区画溝）

元総社蒼海遺跡群(147)（礎石建物跡 総地業断面）

総社村東03遺跡（埋蔵銭）

令和４年度も市内各所で、公共事業、民間開発事業などに伴い、発掘調査を実施しました。古墳時代から中世に至る様々な時代の遺構や遺物が新たに発見されました。

これらの貴重な発掘調査成果を広く市民の皆様にご覧いただくため、「新出土文化財展２０２３」を開催いたします。晩秋のひと時、古(いにしえ）に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

令和５年 10月 31日(火)
～ 11月 12日(日)

入場無料

会場 臨江閣別館 １階 西洋間
前橋市大手町三丁目15番

時間 ９：００ ～ １７：００（入館は16：30まで）
月曜休館

お問い合せ先 前橋市教育委員会事務局文化財保護課 前橋市総社町三丁目11番地4 電話 027-280-6511

江田村西遺跡No.2

●古墳時代の拠点集落

微高地上の狭い範囲に古墳時代の竪穴建物跡が10軒以上確認されました。約500m西にある日高遺跡では弥生時代後半から水田が営まれていますが、これよりやや後の本集落は、西日本から新しい灌漑技術の導入により農業生産域が拡大していた古墳時代前期～中期(4～5世紀)ごろの開発拠点集落であったと考えられます。建物跡からは東海地方にルーツを持つＳ字状口縁台付甕の破片や丁寧に磨かれた高坏などが出土しました。

調査区全景

上細井中西部遺跡群

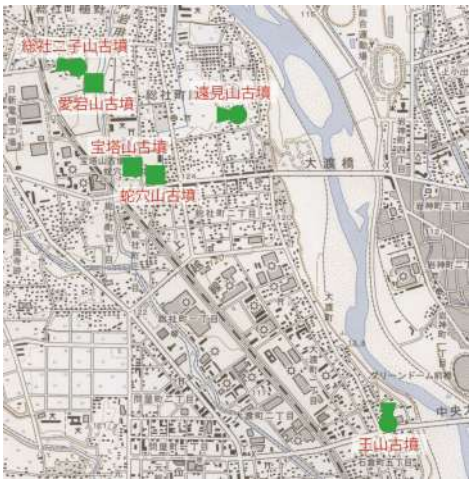
●古墳の周堀から銀象嵌鍔と大刀を発見

古墳は、昭和30年に発行された『南橘村誌』の中で南橘村45号墳と報告されているもので、前庭部などから発見された土器の特徴や埴輪が出土しないことから、古墳時代後期の7世紀に造られたと考えられます。今回発見された大刀と鍔は、周堀の底から見つかっており、古墳が造られて間もないうちに周堀に投棄されたと考えられます。特に大刀は、あえて折り曲げてから投棄された可能性が考えられます。鍔は卵を逆さにした形をしていて8つの四角い透かしをもつ「八窓鍔」と呼ばれるもので、表・裏・側面には、表面に銀をはめ込んだ「銀象嵌」が施されています。

円墳

総社古墳群

総社古墳群は前橋市の西部にある総社町を中心に南北約4kmの範囲に分布し、5世紀後半から7世紀後半にかけて連綿と築かれた首長墓です。現在、前方後円墳3基、方墳3基が残されており、前方後円墳の遠見山古墳(5世紀後半)、王山古墳(6世紀初頭)、総社二子山古墳(6世紀後半)から方墳の愛宕山古墳(7世紀前半)、宝塔山古墳(7世紀中葉)、蛇穴山古墳(7世紀後半)へと前方後円墳から方墳の墳形変化と古墳築造停止が見受けられる群馬県内唯一の古墳群です。この墳形の変化と築造停止は畿内と同一の時期、同一の歩みであるため、総社古墳群の首長層は畿内と密接に政治的な関係を維持していたと推測されます。



総社古墳群の分布

規模や石室構築技術、優美な出土品から東日本を代表する古墳群の一つにも数えられている総社古墳群の範囲と内容を確認するため、前橋市では平成29年度より5古墳の調査を実施し、墳丘形態や周堀範囲の確認に努め、既に国史跡に指定されている総社二子山古墳と宝塔山古墳、蛇穴山古墳に遠見山古墳と愛宕山古墳を加えて総社古墳群として国史跡の指定が予定されています。

●遠見山古墳

遠見山古墳は、総社古墳群の北東部にある前方後円墳です。墳丘や周堀からは多量の埴輪が出土し、墳丘の各段に円筒埴輪を並べた「埴輪列」が確認されています。また、前方部北側には祭祀スペースである張り出し部が確認され、その上方の墳丘で土器を使用したオマツリの跡も確認されています。出土した土器や埴輪などから5世紀後半に造られた古墳と考えられ、総社古墳群では遠見山古墳をさかのぼる大型古墳が見つかっていないことから、総社古墳群の成り立ちを知る上で重要な古墳です。

祭祀跡出土土器

●総社二子山古墳

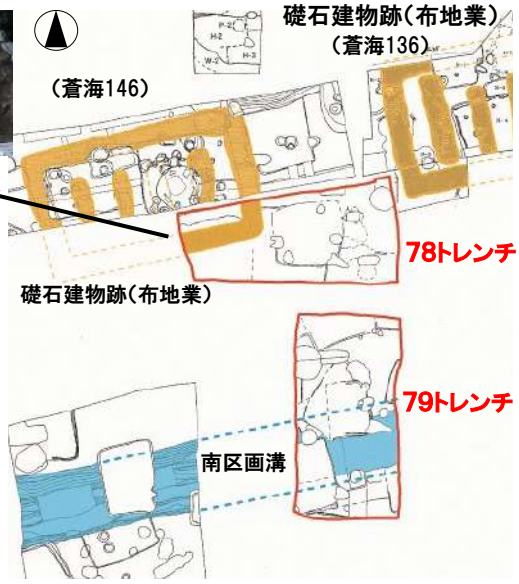
6世紀後半に造られた総社古墳群中最大の古墳で、古墳の大きさや形、石室のつくりなど、高崎市の綿貫観音山古墳とよく似ていることが知られています。これまで古墳の堀の大きさを確認するための調査が行われ、1mほどと浅く、幅が広い堀が確認されました。堀は古墳の周囲を巡っていて、堀の長さは164mに及びます。総社二子山古墳と観音山古墳は共通点が多いことから、総社二子山古墳にも中堤や外堀が存在していた可能性があります。

周堀

推定上野国府跡

●礎石建物跡（布地業）の範囲確認 【78トレンチ】

礎石建物跡（布地業）全景



令和3年度調査（蒼海146）で、宮鍋神社の南150mほどの地点から、礎石建物の基礎である掘込地業（布地業）を検出しました。この建物の南側は調査区外だったため、令和4年度に範囲確認のための調査を行いました。その結果、掘込地業の範囲は、東西12.3m、南北7.7mであることが確定しました。令和元年度調査（蒼海136）からも、布地業を伴う礎石建物が検出されており、今回検出した礎石建物と規模や構造、傾きなどがほぼ同じであり、東西に8mの間隔を空けて並ぶことが分かりました。

●南区画溝の調査 【79トレンチ】

これまでの調査で、宮鍋神社南方周辺の建物群の南側を区画すると考えられる溝跡が検出されており、その存在が推定される地点で調査を行いました。この溝跡は、上幅約3mの大きい溝の底面に上幅約1.5mの小さい溝跡が重なるように存在します。今回の調査でも同様の状況が確認でき、小さい溝跡が埋まった土は固く締まっていました。このようなことから、当初は小さい溝跡が掘削・使用され、その後、その溝跡の一部を埋めて拡張する形で大きい溝跡が掘削された可能性が考えられます。

●掘立柱建物の検出 【80トレンチ】

令和元年度に礎石建物2棟と掘立柱建物が検出された調査区（蒼海136）の北側で調査を行い、官衙関連遺構の有無を確認しました。その結果、柱穴2基と帯状に長く掘られた長方形の穴（布掘り）が一直線に並んで検出されました。この柱列は、掘立柱建物の柱穴の可能性があります。柱列の方向は、周辺で確認されている礎石建物や区画溝の方向に似ていることから、宮鍋神社南方の建物群を構成する施設の一部である可能性が考えられます。

元総社蒼海遺跡群

●国府に関連する可能性のある礎石建物跡を発見【(147)1区】

宮鍋神社の南では、これまでの調査によって古代の役所に関連すると思われる礎石建物跡が計8棟見つかっています。元総社蒼海遺跡群（147）1区の調査では、これに加えて新たに2棟〔右写真1・3号〕の礎石建物跡が見つかりました。

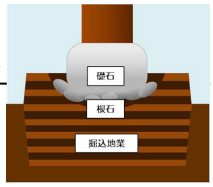
今回見つかった3棟の礎石建物跡はいずれも「掘込地業」を伴っていることが確認できましたが、礎石や根石の痕跡は見られませんでした。ただし、中世の溝跡の覆土内で礎石と思われる巨石が出土しており、礎石建物が廃絶したのちに廃棄されたものと思われます。

1号礎石建物跡は、東西10.2mを測り、南北は3.2mの範囲を確認しました。北辺が調査区外にあるため南北の規模はこれ以上となることが予想されます。この建物跡では、掘込地業の中でも、「総地業」という工法が採られています。これは建物の範囲全域を掘り込んで版築を施したもので、工事の規模の大きさがうかがえます。

2・3号礎石建物跡は、1号礎石建物跡と工法が異なっており、建物の柱の位置に合わせて溝状に地面を掘り込み、そこに版築を施す「布地業」という掘込地業を採っています。2号礎石建物跡は平成26年度の調査で検出された礎石建物跡の延伸部分にあたるもので、建物の北西隅に当たる箇所を検出しました。もう一方の3号礎石建物跡は今回新たに見つかった遺構で、検出した範囲が非常に限定的であるため、全容を明らかにできませんでしたが、建物の南西隅であることが想定されます。

今回新たに見つかった2棟を含め、宮鍋神社周辺で見つかっている建物群は、その規模や配置から倉庫として使用されていたものと考えられます。元総社町には、現代でいう県庁にあたる上野国府が設置されていたと伝えられており、これらの倉庫は国府に関連するものである可能性があります。

掘込地業　模式図▶



「掘込地業（ほりこみじぎょう）」は地面を掘り込んだ後、そこに少しずつ土を入れ、棒などで土を突き固めていきます。これを何度も繰り返すことで非常に硬い地盤を作ることができます。この工法を「版築（はんちく）」といいます。こうして出来上がった硬い基礎の上に「礎石（そせき）」を置き、その上に柱を立てていきます。また、礎石の根元には20～30cmほどの石をいくつか敷き詰めて固定します。この石を「根石（ねいし）」といいます。

●地鎮関連遺物が出土【148】

中世蒼海城に関係する堀跡や掘立柱建物を構成する多数の柱穴などが確認されました。各遺構の切り合い関係から最低でも3段階の変遷が想定され、城内における頻繁な土地利用の変化がうかがわれます。注目される遺構・遺物として、大型井戸に廃棄された多数の五輪塔部材、地鎮と考えられるカワラケ(素焼きの皿)に収められた銭があります。井戸の五輪塔は、その直下から多量の河原石と共に人骨が出土しており、墓域を根こそぎ壊して廃棄したようです。地鎮は掘立柱建物跡に伴うようで、とりわけ深い柱穴が集中するエリアであることから、物見櫓などの特別な建物が想定されます。

カワラケ・銭出土状況▶

●中世寺院跡の区画溝から鬼瓦が出土【91街区】

調査区中央を南北に走行する中世の溝跡が見つかりました。本遺跡西側で確認された中世寺院「小見廃寺」を囲む東側の区画溝と考えられます。上幅3.8m、深さ1.8mを測り多量の礫や瓦が出土しました。小見廃寺は14世紀後半～16世紀頃まで存続したと考えられ、周辺では類例を見ない南都七大寺(奈良)に類似する瓦が大量に出土しました。今回溝跡から出土した鬼瓦も、立体的な表現が際立つ優美なものです。今回の調査により寺域は東西100m、南北78mの東西に長い長方形と推定され、造営者と想定される上野国守護代の長尾氏の政治力の強さを物語っています。

◀1号溝中層　遺物出土状況

西部第一落合遺跡群(5)

●平安時代の集落を確認

南側の調査区(2区)では古墳時代から平安時代(6世紀後半～11世紀)にかけての竪穴建物跡が21軒確認されました。建物内からは土師器や須恵器の坏・甕を中心に土器の表面に釉薬を掛けた灰釉陶器や緑釉陶器などが出土しています。また当時の役人が使用した帯飾りである銅製の丸鞆の破片も発見されました。牛池川と染谷川に挟まれた落合地区ではこれまでの調査で古墳時代から平安時代までの竪穴建物跡が多く確認されている事から、連綿と集落が営まれていた地域であったと考えられます。

２区全景（竪穴建物跡21軒確認）

総社村東０３遺跡

●中世に埋められたまま発見されなかった埋蔵銭

中世の土坑から大量の埋蔵銭が発見されました。ひも状に撚った稲わらを銭の穴に通して97枚ほどを一まとまりとしたもの(一緡)が約1,060緡出土し、総重量は約371kg、総枚数は全国でも6位となる約106,000枚に上ります。一部(334枚)を精査したところ、北宋銭の割合が最も多く約85%を占めました。一番古い銭は前漢B.C175年の「半両」銭で、中国最初の統一通貨であり、出土は極めて稀です。一番新しい銭は南宋銭の咸淳元寶(1265)でした。全容は確認できませんが、地中に埋めた時期は中世前半の鎌倉時代と推定されます。

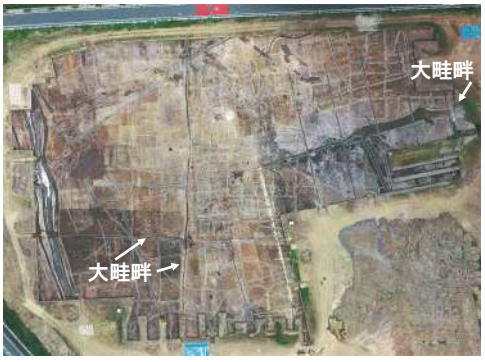
今回の埋蔵銭は、戦乱や不慮の災害のため、急遽地中に埋めたのではないかと考えられます。結局、埋めた当事者は埋蔵銭を取り出すことはなく、今回の発掘調査まで地中に埋もれていました。

埋蔵銭の出土状況

南部拠点地区遺跡群No.12

●火山灰で埋まった平安時代末期の水田跡の発見

古代の前橋南部地域一帯では、条里地割に基づき大規模な水田経営が行われていました。これらの水田は平安時代末期の天仁元(1108)年の浅間山の大噴火による軽石で覆われており、今回の調査でも、この「浅間B軽石」直下で水田が確認されました。条里水田は、約109m四方の正方形(1坪)を基本単位として区画され、今回、その坪境を形成していたと考えられる南北2条、東西1条の大畦畔を確認することができました。



平安時代末期の水田跡全景（白線は水田のアゼ）